

アメリカの政治におけるブログの役割 — ネットルーツの台頭を中心として —

漆 畑 智 靖

The Role of Blogs in American Politics: The Rise of Netroots

Tomoyasu Urushibata

Abstract

The first presidential candidate to capitalize on the potentiality of Internet for political gain was Howard Dean. Behind his campaign were young Internet grassroots activists, who were extremely frustrated with most of the Democratic Party establishment and the mainstream media that could not stand up against the agendas of President George W. Bush. Among those were Jerome Armstrong and Markos Moulitsas, also known as Kos. Armstrong, with his friends, hit upon the innovative idea of connecting potential supporters who were geographically scattered by the use of blogs and rallying them for campaigns. Just around that time, Kos' blog, *Daily Kos*, began to attract an increasing number of progressive Internet grassroots activists. This was a moment for the birth of Netroots, which would later have a considerable impact on American politics. This article analyses the rise of Netroots, particularly featuring Armstrong and Kos, in order to understand the role of blogs in American politics.

Key Words: Netroots (ネットルーツ), Political Blog (政治ブログ), Blogger (ブロガー), Internet (インターネット), Liberal (リベラル)

はじめに

2008年のアメリカ大統領選挙は各候補が「ユーチューブ (YouTube)」や「ブログ (blog)」, 「ソーシャル・ネットワーキング・サービス (Social Networking Service)」などの双方向的インターネット・メディア (ソーシャル・メディア) を本格的に利用する選挙となった。特に勝者となったバラク・オバマ (Barack Obama) が最も巧みにこれを利用したことが注目された。オバマの公式ウェブサイトには設置された「マイ・バラク・オバマ・ドット・コム (www.mybarackobama.com)」というソーシャル・ネットワーキング・サービス (以下, SNS として言及) では, 支持者たちが自分のページを持ち, インターネット上で相互に交流を行うことができた。またこのウェブサイトから「マイ・ネイバーフッド (My Neighborhood)」というページを開くことができた。そこでは, 自分の近くにいるオバマの支援グループやその代表者の名前, 連絡先などを知ることができ, インターネットの外 (以下, オフラインとして言及) でオバマの支持者と交流できるような仕組みになっていた。さらにオバマのマイ・バラク・オバマ・ドット・コムは「myspace (myspace)」や「フェイスブック (Facebook)」のような外部の SNS ともリンクが可能であった。このようにオバマのインターネット選挙は公式のソーシャルメディアと非公式のソーシャルメディアとを幾重にも巧みに結びつけ, オンラインのみならず, オフラインにおける草の根の選挙運動が自然に広がっていくよう工夫を凝らしたものであった¹。また2010年の中間選挙では, 「ツイッター (Twitter)」の利用が本格化するようになった²。そして現在, アメリカ人の約8割がインターネット使用者であるとされ³, ニュースを知るためのメディアとして, インターネットのほうがラジオと紙媒体の新聞よりも一般的となるに至っている。いまやインターネットよりも頻繁に利用されるニュース・メディアはテレビだけという状態となった⁴。こうして, インターネットはアメリカの政治に完全に組み入れられるようになったのである。

インターネットをめぐる技術革新は凄まじい速度で進んでおり, アメリカの政治で現在注目されているのはツイッターや SNS である。つい最近まで持てはやされていたインターネット・メディアはブログであるが, その流行の時代は過ぎ去ったという見方もある⁵。しかしながら, 過去10年間のアメリカの政治で最も注目されたインターネット・メディアは「政治ブログ (political blog)」であったことを忘れてはならない。日本に政治ブログがないわけではないが, 日本でブログといえば, 私的な日記のようなものを思い出すのが普通かもしれない。実は, アメリカでも, ブログ全体の中で政治ブログは少数派であり, 大多数のブログは日本と同じような性格のものであ

る。また日本では既存の大手メディアのサイトを抜かせば、インターネットの政治情報など信頼するに値しないというのが一般的な見方ではないだろうか。アメリカでも、インターネットの政治情報は玉石混交であり、根拠のない噂を事実であるかのように広める質の悪い政治ブログが存在することもたしかである。しかし、アメリカのケースで日本と異なるのは、ブログ全体の中では少数派とはいえ、政治ブログが本格的に発展し、信頼に足る政治ブログが実際に存在するようになっただけでなく、日本では想像もつかない影響力を政治や既存メディアに対して行使できるようになったということである。たとえば、イラク戦争に反対し、共和党から政権を奪おうする民主党の活動家の中心的インターネット・メディアとなった「デイリー・コス (Daily Kos)」は、いまや、登録者数が30万人、1ヶ月のユニークビジター (unique visitor) 数⁶が実に200万人を誇るブログとなった⁷。このブログは一人の政治のアマチュアが始めたに過ぎないにもかかわらず、民主党大統領候補も参加する「ブロガー (blogger)」の会議を開催できるだけの影響力を持ち、またそれだけの敬意を払われる存在となっている⁸。あるいは、2004年に「リトル・グリーン・フットボールズ (Little Green Footballs)」を中心とする保守系のブログが独自の調査によって、CBS 放送の番組「60ミニッツ (60 Minutes)」の誤報を追及し、CBS の顔ともいべきダン・ラザー (Dan Rather) を引退させしめた⁹。2007年には、リベラル系の「トーキング・ポイント・メモ (Talking Points Memo)」の創設者であるジョシュ・マーシャル (Josh Marshall) はジョージ・W・ブッシュ (George W. Bush) 政権のアルベルト・ゴンザレス (Alberto Gonzales) 司法長官を辞任に追い込んだ調査報道で、優秀なジャーナリストに贈られる「ジョージ・ポーク賞 (George Polk Award)」をブロガーとして初めて受賞した¹⁰。この受賞はアメリカのジャーナリズムの世界が政治ブログを尊敬に値する調査報道機関として公式に認めることとなった出来事といえよう。

以上のような華々しい展開にもかかわらず、10年前のアメリカは政治ブログなど存在しないに等しい状態であった。ブロガーたちは当初はほとんど相手にもされない存在であったが、それにもめげず、アウトサイダー的な立場から時に既存のメディアに対し敵愾心をむき出しにしながら、政治ブログで記事を書き続け、その結果、きわめて多くの読者や政治的同志たちからなるコミュニティを築き上げるに至った。そして、このような巨大なオンラインのネットワークが存在したからこそ、無数の草の根の活動家が活躍したオバマのインターネット選挙が可能になったのである。それは一朝一夕に成し遂げられたことではなかった。

ところで、10年前といえば、9.11同時多発テロ事件が起きた時期にあたる。実は、アメリカの政治ブログは9.11同時多発テロ事件やイラク戦争をきっかけに本格的に発

展し始めたという経緯がある。一方、日本では、3.11の東日本大震災と福島原発事故以降、以前にも増して既存メディアの問題点が指摘されるようになった。ツイッターや「ユーストリーム (Ustream)」の役割が目ざされたり、こうしたインターネット・メディアの情報発信に連動して大規模な反原発デモが発生したりした¹¹。しかし、日本には、アメリカのように大きな影響力を持つオルタナティブなインターネットの政治メディア¹²はいまだ存在していない¹³。

アメリカの政治ブログの実態はいかなるものなのであろうか。またどれほどの影響力を政治に対し持つようになったのだろうか。本稿で確認するように、政治ブログには、ジャーナリズム的性格の強いものや政治活動家的性格の強いものなど多様な形態があるが、以下では、主に活動家的性格の政治ブログの分析に焦点を置きたい。特に9.11テロ事件から08年の大統領選に至る時期に「ネットルーツ (Netroots)」と呼ばれるリベラル系のグラスルーツ (草の根) のインターネット活動家たちが台頭していった過程に着目しながら、いかに政治のアマチュアが政治ブログを活用して多大の影響力を獲得するようになったのかということを中心に、アメリカの政治におけるブログの役割について考察したい¹⁴。

第1章 政治ブログの基本的特徴

1. 政治ブログの基本的形態

ブログとは元々は「ウェブログ (weblog)」を省略した用語である。ブログを作成し運営する者を意味するブロガーという用語も「ウェブブロガー (weblogger)」の省略形である。ウェブブログという用語が最初に使用されたのは1997年で、省略形の使用は1999年のことだという。それ以前にも、アメリカにおいてブログの先駆形態やブログを公開する人々がいたが、多くの人々がブログを作り始めるようになったのは1999年頃からのことである。この時期にブログを使いやすくするソフトウェアが無料でダウンロードできるようになったことがきっかけだった。その後、インターネット上のブログは幾何級数的に増加していった。たとえば、2010年に自分のブログを運営していたアメリカ人はインターネット使用者のうちの14パーセントにも達した¹⁵。しかし、ブログの多くは個人の日記のようなものである。政治を主に扱うブロガーはインターネットの使用者全体から見れば、かなりの少数派だといえる¹⁶。

ブログの最小単位は「ポスト (post)」ないし「エントリー (entry)」である。一つの記事が一つのポストとなり、別の記事を載せたポストと空間的に区別されてブログ

上に公開される。またそれぞれのポストにはかならず日時が記録される。自分で文章を作成するのが一般的な日記的なブログとは異なり、政治ブログの場合、マスメディアのニュース記事や映像、他の政治ブログのポストや自分自身の過去のポストなどが頻繁に引用される¹⁷。その場合、情報ソースが「ハイパーリンク (hyperlink)」という形で参照され、それにブロガーの「解説 (commentary)」が加えられることが一般的である。具体的には、ハイパーリンクとその解説のみで文章の引用がまったくない場合もあれば、参照した記事の全体ないし一部の文章の引用がポストに含まれる場合もある¹⁸。

解説は一文だけという非常に短い場合もあれば、かなり長い考察がなされる場合もある。ブロガーによって短いポストを好む者と長文を好む者がいる。たとえば、保守の「インスタパンディット (*Instapundit*)」のグレン・レイノルズ (Glenn Reynolds) は前者であり、オンライン・マガジン、「サロン (*Salon*)」のブロガーであるリベラルのグレン・グリーンウォルド (Glenn Greenwald) は後者である。しかし、一般的には短いポストを日に何度も繰り返す政治ブログが多い。たとえば、レイノルズの一日のポスト数は平均19.5回であったという調査がある。日時が明記された短いポストが可能なブログは速報性に優れているため、この点でテレビや新聞に対し有利となる¹⁹。ブロガーはこの利点を利用して既存メディアに対抗しようと試みる。また人気の高いブロガーは読者²⁰に飽きられてしまわないように、頻繁に情報を更新する必要がある²¹。

2. 双方向性がコミュニティ形成と政治参加を促進する可能性

多くの政治ブログにおいて、読者はポストに対して「コメント (comment)」などの形で自分の見解を表明することが可能である。通常、コメントは公開されているので、他の読者も読むことができる。そのため、特に人気のある政治ブログの場合、次々とコメントが書き加えられ、活発な議論が展開される。このような双方向的機能の存在は激しい非難の応酬や人格攻撃を生み出すこともあるが、読者に参加の意識や所属の感情を生み出し、コミュニティの感覚を芽生えさせることもある²²。

ブロガーの自己認識には、独自の調査に基づいたニュースの報道を目指す「ジャーナリスト型」、独自の調査報道を行うというよりは、既存メディアなどの提供するニュースを独自の切り口で解釈したり (政治心理学というフレーミング)、これに対し価値判断を行ったりすることを主とする「解説者 (commentator) 型」、オフラインでの政治的目標の実現に重きを置く「活動家型」、あるいはこれらの複合形態がある²³。ジャーナリスト形のブログの典型は前述したトーキング・ポイント・メモであ

る。ただし、政治ブログは、多くの場合、個人商店であるから、既存の報道機関とは異なり、調査報道を行うだけの資源が十分にないことが多い²⁴。そのため、独自の調査によってニュースを報道するよりも、解説者の機能が強い政治ブログのほうが一般的である。活動家型の政治ブログとしてもっとも有名なものは前述したリベラル系のデイリー・コスである。活動家型のブログはオンラインのコミュニティ形成で完結するものではない。ウェブ上で形成された人間関係を活用してオフラインで実際に会い（いわゆる「オフ会」）、さらに現実世界で同志を募って、政治的目的を実現することが彼らの最終的目標となる。同じ政治関心を持った不特定多数の人々を時間や地理的拘束を超えて低コストで結びつけることができる点がインターネットの強みである。その意味で政治ブログなどのインターネット・メディアは選挙運動やデモといった政治参加を容易にしたり、政治参加の規模や範囲を飛躍的に拡大したりする潜在的可能性を持っている²⁵。

3. イデオロギー的に二極化する政治ブログスフィア

政治ブログには「ブログロール (blogroll)」が備えられており、そこには、通常、ブログを運営するブロガーのイデオロギー傾向に近い多数の政治ブログのリンクが並べられている。ブロガーたちは人気のある政治ブログで自分のブログを紹介してもらうよう懸命に努力するのが一般的である。人気のある政治ブログで自分のポストが紹介されたり（ハイパーリンクとして参照されたり）、そのブログロールに加えられたりすると、自分のブログに対するアクセス数が格段に上昇するからである。ブログの読者たちも、人気のある政治ブログを読み進める間に、ブログロールやそこで紹介されたハイパーリンクを通じて未知の政治ブログを知るようになり、お気に入りの政治ブログを増やしていくことが多い。このようにして複数の政治ブログとその読者たちは相互に関係づけられていくことになる。こうしたブログのネットワークは「ブログスフィアないしブログ界 (blogosphere)」と呼ばれる。アメリカにおける政治ブログの世界は、重要な例外もあるが²⁶、リベラルのブログスフィアと保守のブログスフィアにイデオロギー的に二極化されがちである。特に人気のあるブログにおいてこの傾向が高い。この傾向は近年のアメリカの現実の政治とマスメディアの政治報道におけるイデオロギー的二極化を反映している。ブロガーは一般に非常にイデオロギー的で党派的な人々である。引用した記事に解説を付与する行為は価値判断を伴う行為である。ブロガーには特定の価値の実現を指向する活動家気質の人々も少なくない。ブロガーたちは既存の報道機関とは異なり、編集によるチェックを受けることなく、「客観性」や「バランス」といった既存のジャーナリズムの倫理基準にも拘束される必要

はないと考える傾向にある。彼らは特定の価値判断に依拠しない報道など存在しないという認識にはっきりと立って、自分たちの正しいと信じる視点からニュースを解釈し、情報を発信する。

報道と意見を区別するよう教えられてきた伝統的なジャーナリストから見れば、ブロガーたちは本当のジャーナリストとは言えないと批判される。ブロガーの中にも、自らをジャーナリストとは考えず、解説者に過ぎないとするものもいる²⁷。また、政治ブログの中には、根拠のない噂や陰謀論を撒き散らすものも存在し、その意味では伝統的なジャーナリストによる批判は妥当なところがある。

伝統的なジャーナリズムによる上述のような批判に対し、ブロガーたちは、既存のジャーナリズムは自らの支配的地位に由来する政治的偏向があるのに、それを認めず、客観報道を云々する偽善者であると反論する²⁸。また彼らは、既存のジャーナリズムがその倫理基準を云々するほどには優れた報道をしていないとも指摘する。「真のジャーナリストのような倫理観をいつになったらブロガーが持つようになるの」という質問に対し、著名なブロガーであるアナ・マリー・コックス (Anna Marie Cox) は皮肉をこめて次のように回答している。「私たち [ブロガー] が誤った報道で馬鹿らしい戦争へと国を導くくらいに権力を持つようになったらね²⁹」。彼女の回答はリベラル系のブロガーの典型的な反応であるが、これはブロガーたちが既存メディアに抱く強い不信感をよく表すものである。

4. 既存メディアのゲートキーパー機能に挑戦するブロガーたち

インターネットの一般的な特徴でもあるが、ブログの作成は非常に低コストで行うことができる。インターネットはグローバルに広がるメディアであり、アメリカ人が英語で読める情報や知識はウェブ上に無数存在する³⁰。オンライン上の情報検索に伴う金銭的成本も低い。そのため、理論的には誰でもブログを公開して「ジャーナリスト」になることができる。「市民ジャーナリスト」になりうるといってもよい。政治ブログを運営するブロガーたちは、多かれ少なかれ、アウトサイダー的な気質を持っている。彼らは新しく手に入れたこの媒体を活用し、既存の大手メディアというコングロマリットがそれまでほぼ独占してきた、政治システム論でいうところの「ゲートキーパー (gatekeeper)」としての地位³¹に挑戦していくことになった。

第2章 戦争ブロガーの台頭とネットルーツの登場

1. 9.11同時多発テロ事件と戦争ブロガーたちの台頭

10年前、政治ブログはわずかしかなかった。1999年6月、オンライン雑誌の「スレイト (Slate)」で仕事をしてきたこともあるミッキー・カウス (Mickey Kaus) がリベラル系の政治ブログを始めたとき、自分がブログを始めたことすら知らなかったという³²。2000年終わり頃には前述したリベラル系のトーキング・ポイント・メモが立ち上げられた。「ニューリパブリック (The New Republic)」の編集者の経験もある保守系の著述家、アンドリュー・サリバン (Andrew Sullivan) が「デイリー・ディッシュ (Daily Dish)」を始めたのも同じ頃である³³。2001年8月にはテネシー大学の法学教授のレイノルズが保守系のインスタパンディットを開始した³⁴。

しかし、政治ブログが本格的に発展し始めたのは2001年の9.11同時多発テロ事件以後のことである。まずは保守系の政治ブログが勢いづいた。後にブッシュ政権の批判者となるサリバンはテロとの戦争の熱狂的支持者となった。インスタパンディットがタカ派の人気を集めるサイトとなった。その他では、リベラル系のメディアで仕事をしてきたマット・ウェルチ (Matt Welch) は職場の連中に「もうたくさんだ」と言ってやりたいと考え、「戦争へようこそ。……私はテロリズムを根絶するためのグローバル戦争を擁護します」というポストとともにブログを開設した。ジャズ・ギタリストでウェブ・デザイナーでもあったチャールズ・ジョンソン (Charles Johnson) は前述したリトル・グリーン・フットボールズという保守系のブログを始めた。9.11テロから危うく逃れた体験を持つ元反戦主義者のジェフ・ジャービス (Jeff Jarvis) は「ウォーログ：第三次世界大戦 (WarLog: World War III)」というブログを開始した。この二人はリベラルから保守のタカ派に転向した人々であった。「戦争ブロガー (warblogger)」と呼ばれるこうした人々はニューヨークタイムズ (New York Times) やCNNといった既存メディアの「リベラル・バイアス」に我慢ができなかった。既存メディアを「MSM (Mainstream Media の略称)」と軽蔑を込めて呼んだ。彼らは「怒りに満ち、尊大で、新しい媒体の潜在的可能性に夢中になった」。タカ派の主張を熱心に展開し、ブッシュの戦争の旗振り役ともなった³⁵。イラク戦争が始まった2003年頃までは政治プロゴスフィアは保守派が圧倒的に優勢であった³⁶。

2. イラク戦争と動き出すリベラル系ブロガーたち

この時期はリベラルにとっては憂鬱な時代であった。リベラル派の政治ブログに関

与し、後にネットルーツ（インターネット・グラスルーツの省略形）と呼ばれるようになる政治活動家たちがいる³⁷。彼らの多くは、その頃、次のように感じていた。ジョージ・W・ブッシュは本当はアル・ゴア（Al Gore）に2000年の大統領選で負けたのに、大統領に就任するや、多くのアメリカ人の見解を無視して非常に保守的なアジェンダを次々と実行に移している。さらに9.11テロを利用して、イラクに戦争まで仕掛けるつもりだ。これを絶対に許してはいけない。しかし、民主党の主流派の議員はまったく頼りにならない。この頃の状況について、後にジェームズ・ウェブ（James Webb）によるインターネット選挙などに関与することになるネットルーツの活動家は次のように回顧している。「民主党の中で革新派の（progressive）グラスルーツは周辺に追いやられていた。自分と保守の違いを曖昧にしようとする [90年代の] ビル・クリントン（Bill Clinton）の戦略（トライアングレーション [三角法のことであるが、より一般に『第三の道』と呼ばれる政治的立場のアメリカにおける呼称] とも呼ばれる）が党の模範となっていた。民主党の選挙候補はさまざまな機会をとらえては、党の真の基盤（base）と見解を違え、自分は中道（centrist）だ、党の左翼の言いなりになどならないと宣伝しようとしていた。要するに、彼らは『リパブリカン・ライト（Republican-lite）』であった。ほとんど全員がブッシュ大統領の侵略戦争に賛成し、ブッシュとの違いは国内政策の周辺的な課題をめぐる点だけという有様だった」³⁸。また、この人物については後に詳しく考察するが、ネットルーツの中心的人物となるマルコス・モウリタサス（Markos Moulitsas）も当時を回顧しつつ、次のように述べる。民主党の革新派にとって課題は二つあった。一つはブッシュ共和党権と戦うことである。しかし、民主党がクリントンの路線によって右傾化していたため、共和党と戦う前に、まずは民主党という「自分の家の掃除をしなければならなかった」³⁹。

彼らは民主党主流派に不満を持っただけではなかった。メディア状況にも幻滅していた。保守系のFOXニュースや保守のトークショーばかりのAMラジオの世界がブッシュ支持なのは当然だとしても、「リベラル」とされるニューヨークタイムズなどの既存メディアも戦争や国土防衛に係わるブッシュ政権のアジェンダをほとんど受け入れてしまったと彼らは考え、失望を深めていた⁴⁰。彼らは自分たちの見解を代弁する政治家やメディアが存在しないことに無力感を感じていた。たとえば、モウリタサスは言う。悲劇と犠牲をもたらすことになるであろうイラクとの戦争からアメリカを救うために、「自由で公正で独立したメディア」を最も必要としているときに、メディアは「ホワイトハウスのプロパガンダ・マシンの付属物」に成り下がってしまっていた。「私は孤独に感じ、孤立感を抱いていたことを思い出す」⁴¹。

このように既存の制度的チャンネルがデモクラシーの機能を果たさないのであれば、デモによって異議申し立てをするのが古きよきアメリカの伝統であろう。実際、アメリカ人全体から見れば、少数派とはいえ、イラク戦争前から全米各地で大規模なイラク反戦デモが発生した。ただ、今回のデモでは、インターネットがますます本格的に活用されるようになっていた点が新しかった⁴²。既存のメディアと民主党の主流派に反発し、自分たちの声を代弁する媒体がないと感じていた人たちは、高い金銭的コストを支払うことなく、自分たちのメッセージを発することができるインターネットというメディアに引き寄せられていったのである。当時の彼らの思いをモウリタサスは代弁して次のように述べている。「メディアに対し愚痴るのではなく、我々がメディアになればよいではないか。政治のエスタブリッシュメントを罵るのではなく、我々がそれを乗っ取ればよいではないか……傍観者であることに満足などせず、我々がプレイヤーになるのだ。メッセージを受け取るだけに甘んじるのではなく、いまや我々もメッセージを送るのだ。メディアの消費者であることだけに満足するのではなく、いまや我々がメディアを創造するのだ⁴³」。

3. ハワード・ディーンとネットルーツの登場

以下では、ジェローム・アームストロング (Jerome Armstrong) とコス (Kos) こと、マルコス・モウリタサスの二人に着目したい。アームストロングは、前述した保守のレイノルズとともに、「ブログの父 (blogfather)」と呼ばれることになる人物である。彼は2001年に「*MyDD*」というブログを開始した。*MyDD* とは、私の直接民主主義 (My Direct Democracy) を意味する⁴⁴。その翌年、*MyDD* でアームストロングと知り合ったコスも自分の政治ブログを立ち上げた。これがデイリー・コスである。この二人こそがインターネットを通じたグラスルーツの政治運動、つまりネットルーツの指導者となっていく人々である。ネットルーツとは、一般的には、左派、あるいはリベラルないし革新派によるインターネットのグラスルーツ政治運動を指す⁴⁵。特にここでは、既存のメディアと民主党の主流派エリートの支配構造を打破し、民主党を真にリベラルな党へと生まれ変わらせることによって、国民の過半数の支持を獲得し、共和党から権力をもぎ取ろうと試みる運動を意味するものとする。そして、このネットルーツとよばれる政治運動の中心的媒体となったのがデイリー・コスという政治ブログであった。

アームストロングとコスはまず2004年の民主党大統領予備選でハワード・ディーン (Howard Dean) の選挙運動に関与し、初めてマスメディアの注目を集めることに成功した⁴⁶。これを足がかりに、彼らの活動は、2006年の中間選挙、さらに2008年のオ

バマの選挙戦へとつながっていく。いまでこそ、デイリー・コスは一ヶ月に200万人のユニークビジターが訪問するブログにまで成長している。しかし、当時、アームストロングもコスも無名の人物であった。ほとんどのアメリカ人はデイリー・コスどころか、政治ブログすら知らなかった。

2004年の大統領選挙は大統領候補たちがブログという新しいツールを利用するという選挙となった。その中でも、ディーンが大統領候補として初めてブログの双方向的機能を有効に活用し、一定の成果を得たことは特筆に価する。ブログなどのインターネットの双方向的機能の活用によって、多くのグラスルーツのボランティアが自発的に彼のために働いた。弱小候補としては予想外の支持を獲得することができた。また大量の小口献金を集めることも成功した。しかし、ブログを活用するというアイデアはディーンや彼を取り巻く選挙のプロが考案したものではなかった。アームストロングたちが思いついたことであった。またディーンはイラク戦争開始直前の03年3月初頭に戦争反対の演説を行い、自らを「民主党の民主主義派 (Democratic Wing of the Democratic Party)」であると主張して、民主党の主流派議員と大手メディアに深く失望していた人々の注目の的となった⁴⁷。この演説はディーンを泡沫候補から人気候補へと押し上げていく重要なきっかけとなった。しかし、アームストロングたちはそれ以前の時期からディーンを大統領にしようとブログで議論をしていた。その頃、バーモントという小さな州のこの泡沫候補にマスコミはほとんど注目していなかった⁴⁸。

当時、アームストロングはポートランド州立大の大学院生であった。2002年の前半の時期、彼の *MyDD* では、ディーンを大統領候補にする可能性について盛んに議論が行われていた。同年7月に彼はディーンと直接会ってみることにした。自分のブログでの議論をプリントアウトした用紙をディーンに見せて、ブログやメールなどを活用したインターネット選挙の可能性について意見交換をした。またアームストロングは自分のブログにコメントを寄せていたテキサス出身の若者二人と会った。若者の一人は「ディーン・ネーション (Dean Nation)」というブログを運営していた。この三人は「ミートアップ (*Meetup.com*)」というサイトを使って、*MyDD* とディーン・ネーションを閲覧しにきている人々が直接会えるようにしたらどうかというアイデアを思いついた。ミートアップは政治集会を念頭に開発されたツールではなかったが、郵便番号を入力すると、同じトピックに関心を持つ見知らぬ者同士が直接会えるよう場所と時間をアレンジしてくれる機能を持つサイトであった。同時的に同様の着想を得る者も出始めていたが、このとき彼らもこの機能を選挙のために応用できることに気づいたのである⁴⁹。

初めてのミートアップはニューヨークのロウワー・マンハッタンのバーで行われ

た。集まったのはブルックリン、クイーンズ、マンハッタンからやってきた男女に同性愛者、白人、アジア系、黒人からなる15人だった。14人は政治のずぶの素人で、ただディーンのために何かがしたいというだけで集まったのであった。彼らにはそれ以外にこれといった共通点もなく、住んでいるところもばらばらだった。当時、世論調査ではディーンの支持率は1パーセント程度に過ぎなかった⁵⁰。それでも、労働組合などの既存の組織を動員すれば、15人程度の人間は軽く集められたであろう。しかし、彼らは誰かに頼まれたのではなく、自らの自発的意思でディーンのためだけに集まってきたのである。しかも、地理的に離れたところに住むこれらの人々は直接に会うどころか、お互いに知り合うことすら、ブログの双方向的機能なしには不可能だったに違いない。彼らはディーンが組織化できたまったく新しい有権者たちであった。その一ヵ月後、ディーンは彼を全国的に有名にする反戦演説を行った。それ以後、マンハッタンのミートアップで行われたことがアメリカ各地でもっと大規模に繰り返されていくことになった。地理的に離れたところに住む多様かつ不特定多数の人々がディーンへの関心を共有するブログで出会う。そこで彼らは意見交換をすることもできる。彼らは自分の意思でミートアップを利用してオフラインでも会い、交流を深めていく。ディーンのリベラリアン運動員になり、そこからリーダーが生まれ、各地でさらに組織化が進んでいく。こうしたオンラインとオフラインの分権的かつボトムアップの参加型ネットワークから草の根の小口献金が公式サイトなどを窓口でディーンの出発点の口座に流れ込んでいく。実際、ディーンは03年後半の半年だけで5,100万ドルの献金を集め、各地で行われたミートアップの参加者合計は19万にも達した⁵¹。この技術革新こそがその後のすべてのインターネットを使った選挙運動の原型となっていた。

たしかに大規模な資金を投入して、従来型のプロによる選挙戦術とSNSなどを駆使するインターネット戦術とを巧妙に組み合わせたオバマの「ハイブリッド型選挙⁵²」に比べれば、アームストロングたちの試みは実に原始的なものであった。しかし、オバマのインターネット選挙の参加型の部分の本質的性格は、たった15人が集まっただけのマンハッタンでのミートアップと何ら変わるところはない。無論、90年代末からEメールを中心とするインターネット媒体を駆使して草の根の運動を強力に推し進めてきた「ムーブ・オン (Moveon.org)」のような他の政治運動もアームストロングたちに重要な示唆を与えたことは間違いない。しかし、ムーブ・オンは政治ブログが本格的に登場する以前にできたネットワークであった。またすでに多くの候補が選挙のためにインターネットを使っていたことも事実である。04年の選挙ではジョン・ケリー (John Kerry) 民主党大統領候補とブッシュ共和党候補もブログを使

用した。しかし、彼らはブログの双方向性の持つ大きな可能性を十分には理解していなかった。従来のテレビを使ったトップダウン型の選挙戦略の延長線上でしかインターネットを理解できなかったのである⁵³。アームストロングたちは違った。しかしながら、この時点では、彼らはまだ無名のアマチュアに等しい存在であった。彼らは自分たちの行った技術革新がアメリカ政治にもたらすことになるインパクトの大きさを知るすべもなかった。

第3章 ネットルーツとデイリー・コスの台頭

1. MyDD のネットワークが蒔いた種

アームストロングの MyDD における多様な人々の交流から、その後のネットルーツの台頭をもたらす種がまかれていった。アームストロング自身、バーモントに引越し、ディーン選挙キャンペーンと正式契約してその選挙コンサルタントとなった。ジョー・トリッピ (Joe Trippi) も MyDD の密かな読者であった。彼はディーンスタッフであり、後にディーン選挙キャンペーン・マネージャーになる人物である。ジョー・ドライマラ (Joe Drymala) とマシュー・グロス (Mathew Gross) は MyDD を通じてアームストロングと知り合った。ドライマラはディーンスピーチライターとなった。グロスはディーンオンライン・コミュニケーション・ディレクターとなり、ディーン公式ブログである「ディーン・フォー・アメリカ (Dean for America)」を立ち上げることになった⁵⁴。

アームストロングはディーン陣営に正式に加わることで、MyDD を一時休止することになった。そのため、コスの運営するブログ、デイリー・コスにますます読者が集まるようになった。デイリー・コスはリベラル系の最大の訪問者数を誇るサイトにまで成長した。コスはアームストロングと政治コンサルタントの契約を結ぶとともに、2004年の選挙で自分のブログを通じて民主党候補のために約100万ドルの資金を集めることに成功した。政治のアマチュアがブログを立ち上げてたった3年目のことであるから、大きな成果と言ってよいであろう。デイリー・コスの特徴は選挙に焦点を当てるといふ点にある。彼はネットルーツを強化し、民主党の改革を進め、真にリベラルな候補を当選させることに重きを置いた。また03年後半から訪問者たちが「ダイアリー」という形でデイリー・コスにブログの記事をポストすることを許可するようになった。これによって、デイリー・コスは一つのブログというよりは、複数のリベラル系のブログのハブ (hub) のようなものになった。読者がポストしたダイアリー

は、デイリー・コスのホームページの右端の部分に掲載されていく。そしてそれらは読者による推薦数が多い順に並べられ、最大の推薦数を誇るダイアリーがトップに置かれる仕組みになっている。自然とリベラルなブログを運営しているブロガーたちがデイリー・コスに集まるようになっていった。こうしてデイリー・コスはネットルーツの牙城となり、コスはそのスポークスマンとなっていった⁵⁵。

2. 巻き返すネットルーツとデイリー・コスの支配的地位の確立

04年は政治ブログの数が急速に増えた時期に当たる。ディーンの大統領選挙でブロガーが注目され、マスコミが政治ブログを取り上げるようになって、その認知度が高まったことが背景にある。また同年、伝統的なジャーナリストとともに、ブロガーに対して民主・共和両党の全国党大会を取材する資格が与えられるようになった。インターネットのアクセス・スピードが上がったこともブログ数の増加の原因であった。

この時期、特にリベラル系のブログ数と読者数が爆発的に増大した。ちょうど保守系のブログが9.11テロをきっかけに増加したように、リベラル系のブログはイラク戦争をきっかけに増加していった。03年には保守系ブログに対し圧倒的に劣勢の立場にあったリベラル系のブログも、05年には保守系を凌駕していた。イラク戦争への国民の不満が徐々に強まっていく中で、このトレンドは08年の大統領選まで続いていった。カーベル (Mathew R. Kerbel) の調査によれば、「ハフィントン・ポスト (*The Huffington Post*)」のような各種の媒体の記事を集約して掲載するという「アグリゲーター (aggregator) 機能」の強いブログやジャーナリズム的色彩の濃いトーキング・ポイント・メモを除いた場合、08年1月に100万人以上のユニークビジターを数えた政治ブログはリベラル系が7つ、保守系で4つあった。これらの11のブログのユニークビジター数を合計すると、リベラル系のビジター数は保守系の2倍以上であった。中でも、デイリー・コスのビジター数は跳びぬけて多かった。大統領予備選の渦中であったとはいえ、この月、実に約2,300万人のユニークビジターがデイリー・コスを訪問した。リベラル系の2位はユーチューブ立ち上げ以前から映像をブログに掲載して人気を博した⁵⁶「ペテン師とうそつき (*Crooks and Liars*)」で約450万、保守系の1位は老舗のインスタパンディットで約700万であった⁵⁷。

因果関係を特定するのは難しいが、このようなリベラル系のブログの優位という条件が、08年の大統領選挙におけるオバマの勝利の一つの背景となったことは間違いないであろう。なお、オバマのインターネット選挙の余韻も覚めやらぬ10年の中間選挙では、共和党が勢力を挽回した。実は、この中間選挙においてブログやSNSなどのソーシャルメディアの活用においても、共和党ないし保守系のほうが勝っていたとす

る調査がある⁵⁸。すでに08年の選挙において共和党の泡沫候補とみなされていたロン・ポール (Ron Paul) が予備選段階でインターネットを駆使して予想以上の戦いぶりを見せたことが話題となっていた。インターネットはコストが低いメディアであるため、その技術革新は誰にでも模倣が可能であるが、これまでの選挙戦において特に資源において劣位にある候補者は失うものがなにもないため、新しいインターネット技術を果敢に活用する傾向が見られた。ハワード・ディーンやロン・ポールはその実例である。ヒラリー・クリントンに対する挑戦者とみなされていたオバマもそうかもしれない。そして、共和党や保守派の活動家たちは、08年の選挙で大敗した後、新しいインターネット戦術を貪欲に咀嚼し、10年の選挙で成功裏にこれを活用することになったのである。

3. コスの述懐

政治ブログが発展し始めてから、まだ10年程度しかたっていない。それにもかかわらず、政治ブログなどのソーシャルメディアのこの伸張ぶりには凄まじいものがある。ハワード・ディーンがネットルーツに担がれたのは04年のことであり、そのとき、彼は、結局、予備選初期段階であっけなく敗北を喫してしまった。オバマの選挙を経た今日から見れば、隔世の感があるが、この04年の選挙におけるディーンの大敗を受けて、選挙のプロやマスメディアの政治解説者から、「だから素人に選挙を任してはいけないのだ」といった声も上がった。

このことに関連して、コスは08年に回顧しつつ、次のように述べている。「多くのプロたちは若い『極左の』政治を知らないナイーブな連中だ……と軽蔑の眼差しで活動家たちを扱った。……メインストリーム・メディアはいつその軽蔑の態度をもって、生意気な成り上がり者だとせせら笑った。……私には『耳を傾けてもらえる』ような立派な経歴もなかったし、メディアと政治のゲートキーパーたちは私と生まれたてだが成長しつつあったネットルーツの同志たちを周辺化させようと懸命になっていた。しかし、そんなことはどうでもよかった。水門は開かれた。そして我々はテクノロジーを使ってたやすく（またはしゃぎながら）その門を破壊した。新しく製造 (= 造語) された (minted) 何千ものネットルーツの活動家たちは大砲の中へと注がれ、エスタブリッシュメントたちの軍隊から発せられる冷笑や否定の声を無視しつつ、自分たちが決めたやり方で政治戦争を遂行する決断を下した。……この新しい革新の運動においては、誰もがリーダーになれるし、誰もが世界を揺るがすことができるのである⁵⁹」。

おわりに

コスが誇らしげに回顧するように、いまや民主党の政治家もメインストリーム・メディアもネットルーツを無視することはできなくなった。たとえば、06年から「イヤリー・コス (Yearly Kos)」という年次会議が開催されるようになった。08年に「ネットルーツ・ネーション (Netroots Nation)」と名称が変わった。これはネットルーツのプロガーが一堂に会する会議である。それは、我々の「コミュニティを強化し、行動へと鼓舞し、ステイタス・クオに挑戦するための革新的なアイデアのインキュベーターとして役立つ」ためのものであるとされる。元々、コスという名前が冠せられていたこの会議はコスが主催するのではなく、ちょうどアームストロングたちのミートアップのときのように、ネットルーツから自発的にわきあがったアイデアをブログ上で討議し、オフラインで実現させたものであった⁶⁰。大統領選が実質的に始まっていた07年のイヤリー・コスには1400人のプロガーが参加した。5人の民主党大統領候補も出席した。実はその数日前に、民主党指導者評議会 (Democratic Leadership Council) の年次総会が行われていた。民主党指導者評議会は「穏健ないし保守的な」民主党議員が所属する評議会である。この評議会はいわゆる第三の道の政治的立場に依拠し、90年代初頭にクリントン大統領を誕生させ、民主党を右傾化させる一つの原因となった組織であり、民主党の主流派に大きな影響力を行使できる存在である。無論、ネットルーツはこの組織を打破すべき勢力と捉えている。実は、民主党指導者評議会の年次総会にはヒラリー・クリントンを含め、大統領候補は誰一人として参加しなかった。その数日後のイヤリー・コスに5人の大統領候補が集結したにもかかわらずである⁶¹。この意味で、ネットルーツが民主党の実力者にとって無視すれば、危険であると恐れられる存在にまでに成長したことは間違いない。

ただし、これをネットルーツが民主党の主流派の一角となったと解釈するのは誤りである。ネットルーツを一つの背景として大統領となったオバマの政権においてクリントン大統領時代の勢力は健在であり、彼らが中心的役割を果たしているのである⁶²。前述したように、オバマは、選挙戦中、従来型の選挙のプロによるトップダウンの選挙手法とインターネットを使ったボトムアップの選挙手法を巧みに組み合わせるといふハイブリッド型選挙を行った。実は、オバマはインターネットの草の根の活動家の貢献を余すことなく利用しつつも、活動家たちの急進的な政治主張や好ましくない発言の囚人にならないよう慎重に彼らとの距離をとった。特にデリー・コスに代表される既存のネットルーツの勢力に対しては、その支持を当てにしながらも、敬して遠ざけるという姿勢をとり、むしろ彼らを迂回しつつ、よりコントロールをしや

すい別の新たな有権者たちにソーシャルメディアを通じて直接接触し、後者の草の根運動の発展を促すことを試みたのである。オバマは市民活動家というアウトサイダー的な世界と連邦上院議員というインサイダー的世界の双方を熟知した人物である。そのようなオバマだからこそ、プロによるトップダウン型選挙とインターネットのボトムアップ型の選挙とを最適のバランスで統合することができたといえようが、その反面、ネットルーツの活動家たちには大いなる不満が残った⁶³。ネットルーツの活動家たちは、既存のゲートキーパーに不満を感じれば、いわば反乱を起こしかねない人々であり、また実際、その反乱を実行に移すことで、ここまで大きな影響力を行使できる存在に成長してきた。インターネットを成功裏に利用して大統領となったオバマとネットルーツの間には和解することが不可能な矛盾が存在し続けている。この矛盾の行方こそが12年の大統領選挙の帰趨を占う重要な要因の一つとなるであろう。

注

- 1 前嶋和弘著『アメリカ政治とメディア』北樹出版、2011年、142-6頁。Matthew R. Kerbel, *Netroots: Online Progressives and the Transformation of American Politics*, Paradigm Publishers, 2009, pp. 143-6.
- 2 Aaron Smith, “22% of Online Americans Used Social Networking or Twitter for Politics in 2010 Campaign,” Pew Internet and American Life Project, January 27, 2011.
- 3 Kathryn Zickuhr, *Generation 2010*, Pew Internet and American Life Project, December 16, 2010.
- 4 “Understanding the Participatory News Consumer,” Pew Internet and American Life Project, March 1, 2010.
- 5 Zickuhr, *op.cit.*
- 6 ユニークビジター数とは、特定の期間に特定のウェブサイトにはアクセスした訪問者数の合計であり、1度以上そのサイトを訪問しても、1人としてしか計算しないことによって、そのサイトを訪問した実質的な訪問者数を示そうとするものである。
- 7 “About Daily Kos,” in *Dailycos.com* (<http://www.dailykos.com/special/about2>).
- 8 Kerbel, *op.cit.*
- 9 Scott Rosenberg, *Say Everything: How Blogging Begin, What It's Becoming, and Why It Matters*, Three Rivers Press, 2009, pp. 276-81. なお、ラザーは誤報は証明されていないと主張している。
- 10 *Ibid.*, pp. 160-1; Robert W. McChesney and John Nichols, *The Death and Life of American Journalism*, Nation Books, 2010, pp. 90-3.
- 11 11年4月10日に東京都杉並区高円寺で行われた反原発デモは、近年の日本の基準から見れば、大規模なデモであり、多くの若者も参加していた。日本の大手メディアはこれをほとんど報道しなかった。デモの中心となったのは松本哉氏が率いる素人の乱（高円寺のリサイクルショップ）とその周辺の人々であり、このデモに際して伝統的な組織動員は行われなかつ

たので、インターネットが果たした役割が大きかったと考えられる。本稿においていわばアマチュア（素人）たちがインターネットを使って政治的影響力を拡大していったアメリカの政治過程に着目した理由の一つは、3.11以後の日本のこうしたデモとメディア状況に筆者が強い問題関心を持つからである。ただし、素人の乱は本稿が扱ったアメリカのネットルーツとは政治的志向性が非常に異なる点を付言しておく。

- 12 アメリカでは、既存メディアをメインストリーム・メディアと呼び、これに対抗するメディアを「オルタナティブ・メディア (alternative media)」と呼ぶことある。
- 13 当初、『恵泉女学園大学紀要』第23号に掲載したアメリカ保守主義運動に関する拙稿の連載となる論文を準備していたが、それは次号に回し、今回は、注10に述べた理由によって今日の社会状況にとって「レリバンシー (デイヴィット・イーストン)」が高いと考えられる問題を考察することにした。またそのため、筆者は民衆をエンパワーする潜在的可能性というインターネットのポジティブな側面を中心に分析した。その問題点や限界を考察した研究としては、たとえば、以下を参照されたい。Richard Davis, *Typing Politics: The Role of Blogs in American Politics*, Oxford University Press, 2009; Antoinette Pole, *Blogging the Political: Politics and Participation in a Networked Society*, Routledge, 2010; McChesney and Nichols, *op.cit.*
- 14 本稿は活動家的志向性が強く、民主党の枠内での改革を目指すブロガーたちの運動を主たる考察対象とした。よりラディカルな主張のブログや「ジャーナリズム」的志向性が強い政治ブログは取り扱っていない。保守系のブログについても若干考察したが、保守系のブログへの別の視点からの分析については、拙稿（「最近のアメリカにおける右翼運動の現状に関する一考察－オバマ大統領への陰謀論的非難のケーススタディー」『恵泉女学園大学紀要』第22号、2009）も参照されたい。
- 15 Zickuhr, *op.cit.*, p. 21.
- 16 Davis, *op.cit.*, pp. 3-4.
- 17 既存のメディアに対する強い対抗心にもかかわらず、アメリカの政治ブログは既存メディアが提供するニュースや映像に情報ソースを依存するところが多い。そしてこの依存こそが、逆説的に、アメリカの政治ブログの読む価値を高めているところもある。「信頼しうる情報ソース」のハイパーリンク（本注では、以下、リンクとして言及）が載せられていない場合、政治ブログの文章は単なる個人の感想文になってしまいがちである。リンクがなくても、一定の「評判」を獲得した人物、たとえば、研究者やアドボカシー団体の専門家、著名なブロガーなどが書くブログなら、まだよい。あるいは、真の市民メディアの立場を貫く場合なら、非常に価値が高い情報になる。徹底した調査報道を行うか、デモやマイノリティの体験など大手メディアが扱わない問題を映像とともに独自報道するといったことである。しかし、個人の感想文からなる政治ブログの問題点は、一般的に情報の真偽を確かめるコストが高くなりすぎて、インターネットの利点が減ってしまうか、真偽など関係ないという立場をとるかのはいずれかになってしまう点にある。リンクでオリジナルなソースをすぐ読めるという点が紙媒体の雑誌や新聞と異なる政治ブログの醍醐味である。リンクがあるからこそ、検索コストが低減し、同じ質の記事であれば、紙媒体の記事よりも政治ブログの記事のほうが価値が高まる。あるいは、オリジナルなソースのリンクをつけやすい環境があったほうが質

の低い政治ブログが淘汰されやすくなる。実は、政治ブログが日本よりも、アメリカで盛んになった一因は、アメリカの大手の新聞や雑誌、テレビ局が過去の記事や映像のアーカイブをかなり多く無料で公開しているからだと考えられる（しかも、英文の信頼しうる無料で公開されたオンラインの文書や映像はグローバルかつ無数に存在している）。既存メディアがジャーナリズムとして質が高く、その記事や映像の多くを無料で公開しているという環境が存在していたほうが、資源をわずかにしか持たない市民ジャーナリストが活躍しうる可能性はむしろ高まる側面もある。調査報道をめぐるフリーライダー問題という深刻な課題は存在するものの、政治ブログと既存のメディアは対抗関係にあるだけでなく、相互補完的な関係にあるといえる。

18 *Ibid.*, pp. 56–8.

19 ツイッターの登場は、政治ブログの速報性における優位を脅かすことになった。政治ブログにおける速報性は、編集のチェックが要らないということとも関係している。政治ブログは、不確実な情報をとりあえず読者に投げかけておいて、様子を見ながら、次々とフォローアップの記事を書いていくというやり方ができる。彼らの中には、これを新しいジャーナリズムだという人々もいる。その是非は別として、こうした方法はまともな新聞社やテレビ局には不可能な芸当であろう。ただし、アメリカの主要メディアは、当初はブログを馬鹿にしていたが、政治ブログの影響力の増大を受けて、ブログを自らの公式サイトに取り込むことで対抗するようになった。この場合に問題になるのは、たとえば、新聞の通常の記事には編集のチェックが入っているのに、公式サイトへのブログには編集のチェックが入らないというダブル・スタンダードが発生することである（ニューヨークタイムズのように、ブログにも編集のチェックを入れているメディアは少数派である）。この点においては、既存のメディアは、かつてのように、政治ブログはジャーナリズムの基準に達しないと批判することが難しくなってきたといえる。

20 ブログはいわゆるマルチ・メディアであるため、テキスト（文章）のみならず、画像や映像も掲載される。したがって、ここでの「読者」とは、ブログの文章を読んだり、映像を視聴したりするオーディエンス（audience）を意味するものとする。

21 *Ibid.*, pp. 57–61.

22 政治ブログによるコミュニティ形成の促進を証明しようとした研究に次のものがある。その場合、論争の一つの焦点は、インターネットがソーシャル・キャピタルにむしろマイナスの影響をもたすとするパットナム（Robert Putnam）の見解の真偽をめぐる問題である。Kerbel, *op.cit.*; Pole, *op.cit.*; 2010; Jason Gainous and Kevin M. Wagner, *Rebooting American Politics: The Internet Revolution*, Rowman & Littlefield, 2011；前嶋，前掲書，82－3頁。

23 Davis, *op.cit.*, 110–3.

24 トーキング・ポイント・メモやハフィントン・ポストのように、政治ブログでも、優れた調査報道を行える記者を抱えている場合もある。しかし、これは例外である。一般的には、政治ブログには、高いコストや裁判のリスクが伴いがちな調査報道を内外の多様な問題に対して行う資源などない。その意味で政治ブログが既存の報道機関に取って代わることはできない。むしろ政治ブログの重要な役割の一つは、オルターナティブなメディアというアウトサ

イダー的な立場から、本来、権力の監視人であるべき既存のメディアの機能不全を監視し、これを通じて、既存のメディアの報道の質の改善を促していくことにあるといえる。この点でアメリカの政治ブログは一定の成果を上げたといつてよい。なお、現在、購読者数の減少の長期的トレンド、広告収入に過度に依存したアメリカ新聞業界に特殊なビジネス・モデル、インターネットの普及、重い債務負担、経済不況による広告収入と購読者数の激減などを背景に、アメリカのかんりの新聞が産業として成り立たなくなる可能性すら、指摘されるような状況が存在する。新聞の倒産や記者のリストラが相次いでおり、調査報道の充実どころの話ではなくなつてきている。調査報道は現代デモクラシーにとって不可欠な基盤であるが、いまこの基盤が崩れつつある。こうした状況を考察するには、既存のメディアに挑戦するブログという枠組みだけでは、不十分である。この点については、以下の文献を参照されたい。McChesney and Nichols, *op.cit.*; Rick Edmonds, Emily Guskin and Tom Rosenstiel, "Newspapers: Missed the 2010 Media Rally," in *The State of the News Media 2011, Annual Report on American Journalism*, Pew Research Center's Project for Excellence in Journalism, 2011.

- 25 インターネットが異議申し立ての表明や集団の形成といった政治参加のコストを低下させるため、政治参加を促進する潜在可能性を持っているということは一般的には正しい。ただし、ある個人がこの潜在的可能性を実際にどの程度活用できるかということはその個人を拘束するさまざまな社会・経済的条件に依存する。これに関して、いくつかの考慮すべき課題がある。第一に、アメリカにはデジタル・ディバイドが存在する。アメリカ人の約2割がインターネット使用者ではない（ブロードバンド普及率やモバイルのインターネット接続が可能になったことは事態を複雑にする）。第二に、アメリカにおいては、学歴と所得の高い人々のほうがそうでない人々よりも、インターネットを通じて政治参加をする傾向が高い。これは第一の論点とも関係しているが、周知の通り、63年のアーモンドとバーバの古典的研究（『現代市民の政治文化』）以来、アメリカ人の政治参加一般についても同様の傾向があると繰り返し指摘されてきた。よく知られた民主主義のパラドックスがインターネットの場合にも当てはまるということである。08年の大統領選の政治行動を調査した最新の研究として、バーバも参加した以下の文献を参照されたい。Aaron Simth, Kay Lehman Schlozman, Sidney Verba, and Henry Brady, *The Internet and Civic Engagement*, Pew Internet and American Life Project, September 2009. 第三に、現在、政治ブログスフィアは階層的世界であり、10年前より、ライバルとの競争に勝つための障壁が高くなっている。これは政治ブログ間の競争の結果、一握りの著名なブロガーと大多数の無名のブロガーが出現したことによる。第四に、この一握りの著名なブロガーはきわめて教育程度が高く（博士号取得者が多い）、白人男性で、大学教授やジャーナリストなどの知的職業に従事している傾向が高い。彼らはインターネットによってエンパワーされなければ、困るような人々ではない。また政治ブログの読者も程度の差はあれ、著名なブロガーと似た属性を持つ人々が多い。第四に、何人かの著名なブロガーたちはメインストリーム化されることで、既存のエリートに近い存在になりつつあり、また既存のエリートも著名なブロガーを取り込もうと試みている。以上のようなブログスフィアに発生した不平等については多くの研究が存在する（たとえば、Davis, *op.cit.*）。ただし、政治ブロガー全体に占める人種的・民族的マイノリティのブロガーの割合はその人口

比率に比べて高いという指摘 (*Ibid.*), インターネットの政治参加を通じて同様の集団や性的マイノリティ, 女性のソーシャル・キャピタルが高まる側面もあるという研究 (Pole, *op. cit.*, 2010) もある。技術革新のスピードが速いことも考慮しなければならない。本稿はコストとアームストロングというアクターがインターネットの提供する機会をいかに活用したかという点に焦点を置きたいわば解釈学的研究である。そこで提示された考察は, 本注で指摘した構造的文脈に位置づけて理解する必要がある。

- 26 デイリー・ディッシュのアンドリュウ・サリバンやグレン・グリーンウォルドが一例である。
- 27 アメリカ史の中で「客観性」や「バランス」といった倫理基準に従うのがジャーナリストであるという見方が成立したのは20世紀以降のことに過ぎない。またこれまでジャーナリズムの定義をめぐる論争が何度も行われてきた。その意味で, 今日, インターネットの発展といわゆる市民ジャーナリストの出現によって, ジャーナリズムとは何かという未解決の問いに再び注目が集まるようになってきていると見るべきである。このことは報道の自由をめぐる法的問題にも関係している。かつて反グローバリゼーション運動を取材し, これを映像に収めたジョシュ・ウォルフ (Josh Wolf) が裁判で映像を提出するよう求められるという事件があった。この抗議運動の警備に当たっていた警官がたまたま負傷したためである。ウォルフは自らを市民ジャーナリストであると規定し, 一般のジャーナリストに認められるのと同様に, 情報ソースを開示する義務はないとして, 映像の提出を拒否したことから, 長期間の拘留を被った。判事は, ウォルフはジャーナリストではなく, 単なる活動家に過ぎないとしたのである。このときは, 大方のジャーナリストはウォルフを擁護する側に回った (Rosenberg, *op. cit.*, p. 275.)。ウィキリークス (Wikileaks) をめぐる論争も本質的には同様の問題を含むが, ウィキリークスとジュリアン・アサンジ (Jurian Assange) に対し徹底的な弾圧政策を遂行するオバマ政権に対し, 大手メディアのジャーナリストの中には, オバマ政権を擁護し, アサンジを批判する者も少なくなかった。これに対し, プロガーのグレン・グリーンウォルドは, ウィキリークスは通常の報道機関と同様の権利を持つとみなし, 報道の自由の観点からウィキリークスを擁護し, 既存のメディアとオバマ政権を手厳しく批判した。このように, 市民ジャーナリストやウィキリークスはジャーナリズムといえるのかどうか, ジャーナリズムとは何かという問いをめぐって激しい論争が展開されているのである。なお, 市民的自由に関するグリーンウォルドの考察については, 以下の文献を参照されたい。Glenn Greenwald, *How Would a Patriot Act?: Defending American Values from a President Run Amok*, Working Assets Publishing, 2006; Glenn Greenwald, *With Liberty and Justice for Some: How the Law is Used to Destroy Equality and Protect the Powerful*, Metropolitan Books, 2011.
- 28 *Ibid.*, pp. 42–55; Kerbel, *op. cit.*, pp. 39–60; Gainous and Kevin, *op. cit.*, pp. 103–21.
- 29 Rosenberg, *op. cit.*, p. 277.
- 30 本稿では, 英語で書かれた政治ブログのみを考察対象としている。
- 31 David Easton, *Systems Analysis of Political Life*, John Wiley, 1965.
- 32 Rosenberg, *op. cit.*, p. 135.
- 33 Andrew Sullivan, “Why I blog,” in *The Atlantic.com.*, November 2008.

- ³⁴ Rosenberg, *op.cit.*, p. 139.
- ³⁵ *Ibid.*, 137–40.
- ³⁶ Kerbel, *op.cit.*, p. 40; Lowell Feld and Nate Wilcox, *Netroots Rising: How a Citizen Army of Bloggers and Online Activists is Changing American Politics*, Praeger, 2008, p. 169. なお、アメリカのインターネットにおいては、9.11同時多発テロ事件の前は、フリー・リパブリック (*Free Republic*) やドラッジ・リポート (*Drudge Report*) など、保守系媒体が優勢であった。ドラッジ・リポートはモニカ・ルインスキー事件をスクープしたウェブサイトとしてあまりに有名であるが、次の著作がクリントン時代におけるドラッジを含む保守系メディアの状況や共和党のメディア戦略を活写している。デイヴィッド・ブロック著 (佐々木信雄訳) 『ネオコンの陰謀—アメリカ右翼のメディア操作—』朝日新聞社, 2004年。フリー・リパブリックについては、前掲拙稿でも分析したので、参照されたい。
- ³⁷ ネットルーツという言葉はジェローム・アームストロングが最初に用いたとされる。
- ³⁸ Feld and Wilcox, *op.cit.*, p. 1.
- ³⁹ Markos Moulitsas Zuniga, *Taking on the System: Rules for Radical Change in a Digital Era*, A Celebra Book, 2008, pp. 30–3.
- ⁴⁰ *Ibid.*, p.xx; Kerbel, *op.cit.*, p. 8.
- ⁴¹ Markos Moulitsas Zuniga, *op.cit.*, p. 4.
- ⁴² Feld and Wilcox, *op.cit.*, p. 12.
- ⁴³ Markos Moulitsas Zuniga, *op.cit.*, p. 9.
- ⁴⁴ より正確には、当初、*MyDD* とは、My Due Diligence の頭文字を表すものとされたが、06年に My Direct Democracy へと変更された。しかし、後者はアームストロングが元々持っていた政治的志向性を表現すると見てよい。
- ⁴⁵ 保守系のインターネットのグラスルーツ運動を指す場合もないわけではないが、まれである。
- ⁴⁶ *Ibid.*, pp. 1–27; Davis, *op.cit.*, pp. 43–7.
- ⁴⁷ 実は、ディーンはバーモント州知事時代、リベラルの体現者というような人物ではなかった。この点については以下の文献に詳しい。砂田一郎「2004年選挙で活力を取り戻したりベラル派」久保文明編『米国民党—008年政権奪回への課題—』財団法人国際問題研究所, 2005年。なお、砂田論文はディーンの大統領選挙について非常に包括的な分析を行っている。
- ⁴⁸ *Ibid.*, pp. 6–8; pp. 11–2.
- ⁴⁹ *Ibid.*, pp. 14–5.
- ⁵⁰ *Ibid.*, p. 14. これはデイリー・コススの著名ブロガーである DavidNYC による描写である。
- ⁵¹ 砂田, 前掲論文, 41頁。
- ⁵² Kerbel, *op.cit.*, pp. 133–48.
- ⁵³ *Ibid.*, pp. 136–7.
- ⁵⁴ Feld and Wilcox, *op.cit.*, p. 15.
- ⁵⁵ Davis, *op.cit.*, pp. 44–6; Kerbel, *op.cit.*, p. 46.

- ⁵⁶ Eric Boehlert, *Bloggers on the Bus: How the Internet Changed Politics and Press*, Free Press, 2009, p. 72–4.
- ⁵⁷ *Ibid.*, pp. 44–5.
- ⁵⁸ Aron Simith, *The Internet and Campaign 2010*, Pew Interent and American Life Project, 2011.
- ⁵⁹ Markos Moulitsas Zuniga, “Foreword,” in Feld and Wilcox, *op.cit.*, pp. viii–ix.
- ⁶⁰ Kerbel, *op.cit.*, p. 127.
- ⁶¹ Davis, *op.cit.*, p. 33.
- ⁶² 経済閣僚について、オバマが選挙戦中のアドバイザーを遠ざけ、いかにクリントン時代の実力者たちを登用していったのか、それがいかなる帰結をもたらしたのかに関する詳細なドキュメンタリとして、以下の文献が非常に参考になる。Ron Suskind, *Confidence Man: Wall Street, Washington, and the Education of a President*, HarperCollins, 2011.
- ⁶³ Kerbel, *op.cit.*, pp. 143–8.